幕末の書状を読む

1　史料について

（1）中村（宏）家文書

・総点数 1,318 点の文書群（収蔵文書目録第 42 集『諸家文書目録VI』収録）

・中村家は代々孫兵衛（まごべえ）を襲名し、幕末期に上中条村（現熊谷市）旗本領の組頭を務めた家。明治に入ると、中村孫兵衛は大里幡羅榛沢男衾郡長（明治 23 年～同 29 年）や大里郡長（明治 29 年～同 41 年）などを歴任した。また、自由民権運動団体「七名社（しちめいしゃ）」のメンバーとして活躍したことが知られている。

・中村（宏）家文書は以下の 4 つの文書群から構成されている。

①上中条村旗本八木氏知行所分の組頭文書および上中条村の戸長役場文書

②中村孫兵衛氏の個人文書（県会議員・大里郡長・典獄・七名社など）

③中村家の家文書・典籍群

④旛羅郡下奈良村（現熊谷市）の旧吉田市右衛門家文書群

・吉田市右衛門は下奈良村の名主であり、関東屈指の豪農、また慈善事業家として知られている。中村孫兵衛と吉田家は縁が深かったため、近代に吉田家文書の一部が譲られたといわれている。関連する吉田家文書は文書館に「吉田（市）家文書」として 31 点、ほか国文学研究資料館、東京大学法制史資料室などに分蔵されている。

（2）宛所：吉田六左衛門

・吉田六左衛門は、旛羅郡四方寺（しほうじ）村（現熊谷市）で酒造を営んだ豪農。本史料の六左衛門は 12 代宗悌。六左衛門は後述の清水卯三郎や、浪士組に参加する甲山（現熊谷市）の根岸友山（ゆうざん）らと姻戚関係を結んでいる。また、明治時代には吉田市十郎（市右衛門）とともに中村孫兵衛らが進めた那須野原開墾事業に参加するなど地域の有力者たちと密接なつながりを持っていた。吉田市衛門家は享保 11 年（1726）に六左衛門家から分家した家である。

（3）出所：箕作秋坪（しゅうへい）（文政 8 年（1825）～明治 18 年（1886））

・備中呰部（あざえ）（現岡山県真庭市）出身。江戸に出て洋学者箕作阮甫（げんぽ）の門人となる。その後、緒方洪庵の適塾に入門。また、阮甫の養子となり、幕府天文台で翻訳に従事し、蕃書調所の教授手伝となる。文久元年（1861）、福沢諭吉らとともにヨーロッパへ渡り、慶応 2 年（1866）には国境交渉のためロシアへ派遣されるなど幕末の外交で活躍した。明治維新後は東京で三叉学舎を開き、明六社にも参加するなど文明開化に貢献した。

・吉田六左衛門と秋坪の弟子である羽生の商人清水卯三郎とは縁戚関係にあった。秋坪の勧めを受けた卯三郎と六左衛門の娘婿吉田二郎が渋沢栄一らとともに 1867 年のパリ万博に参加したことが知られてい　る。

２　語句解説

・満堂：堂にあつまった一同。みなさん。

・浪士：主家を離れた武士。とくに本史料においては浪士組の構成員を指す。浪士組は文久 3 年（1863）、将軍徳川家茂上洛警護のために結成された組織。浪士組は京都壬生村に到着したものの分裂し、後に新選組となる近藤勇らを除く 209 名が江戸に帰還した。その後、京都へ出発した後に応募した 126 名と合流。
彼らは本所三笠町（現墨田区）の小笠原加賀守元屋敷を本拠とし、周囲に分宿した。

・梟首（きょうしゅ）：さらし首。

・捨札（すてふだ）：処刑される罪人の氏名や罪状などを記して公示した高札。

・無縁寺：両国回向院（えこういん）。本来は縁者がなかったり、身元の知れない死者を葬る寺を指すが、本史料においては明暦の大火（1657）以来多くの無縁仏を埋葬している。

・佐竹：佐竹義堯（よしたか）。久保田藩（秋田藩）主。

・相馬：相馬充胤（みちたね）。相馬中村藩主。

・大久保加賀守：大久保忠礼（ただのり）。小田原藩主。

・酒井左衛門尉：酒井忠篤（ただずみ）。庄内藩主。

・阿部播磨守：阿部正耆（まさひさ）。白河藩主。

・松平右京亮：松平輝声（てるな）（大河内輝声）。高崎藩主。

・博労町：馬喰町。

・水府：徳川慶篤（よしあつ）。水戸藩主。15 代将軍徳川慶喜の兄。

３　文書の内容

・挨拶と近況報告。

・浪士が蔵前（現台東区）にて暴行し、2 人をさらし首にした。これは浪士の仲間同士の事件らしいが詳しくはわからない。捨札には、この者は浪士を名乗って市中を騒がし、金銀飲食を貪る不届き者であるので梟首としたとある。誰もこの首を詳しく調べていなかったが、翌々日になると浪士が来てこれを無縁寺へ持っていき、埋めた。そのためか、ついに幕府は五諸侯に命じて市中の浪士を取り締まるよう仰せになった。武装した 150 人ばかりが交代で昼夜見廻りをしている。ところが、一昨日より何かあったのだろうか、馬喰町の旅宿にいる浪士を捕縛しようと庄内藩士が三丁目四丁目を囲み、三笠町の浪士の屋敷をほか四藩 1,000 人あまりが囲んでいて、両国あたりの騒動は言葉にできないほどであった。三笠町では巨魁 2 人が捕らえられ、馬喰町でも 13 人程が捕まった。水戸藩によって鶴田に寄宿していた浪士も捕らえられた。彼らは昨夜近辺の大関 2 人を仲間にしていた。この件の始末がどうなったのかわからないが、わかり次第書状で申し上げる。何者かが横浜へ 14 日夜中に出張を仰せつけられた件も諸侯たちが騒ぎ立てているが、これも詳細はわからない。

・水府公は 12 日に御帰着されたが、その後は未だ何事もない。

４　文書の背景

（０）政治情勢

・安政７年（1860）３月の桜田門外の変以降、権威回復を目指す幕府は公武合体の方策として皇女和宮と将軍家茂の婚姻を企てる。降嫁の条件として幕府が破約攘夷決行を約束したことで攘夷運動が活発化する。そして、文久３年（1863）２月に将軍が上洛して天皇に攘夷決行の見通しを申し上げることとなった。

（１）浪士組の上洛と帰還

・文久３年（1863）正月、幕府は庄内の尊王攘夷志士清河八郎の策を取り入れ、攘夷実行のために上洛する将軍徳川家茂の警護を担う浪士組の募集を行なった。

・清河は大里郡甲山村の尊王攘夷派の豪農で長州藩ともつながりのある根岸友山に浪士募集の協力を要請している。根岸の協力もあってか、現埼玉県域からは50名あまりが浪士組に応募した。

・浪士組は京都に到着するが、生麦事件を発端とする英国との戦争危機の高まりを受け、清河らは江戸防衛のためわずか10日あまりで江戸に帰ることを決める。しかし、将軍の警護を最優先任務とする芹沢鴨や近藤勇らが強硬に反対したため、浪士組は分裂し、後に新選組となる20名を京都に残して３月28日に江戸へ戻った。

（２）偽浪士梟首と浪士組の取締り

・江戸に戻った浪士組は英国との対決に備えるが、幕府から攘夷実行の命令が出ず、合法的な活動は行なえなかった。そのため、清河らは独自に攘夷決行の期日を４月15日と決め、水面下で軍資金の調達を始める。

・浪士組の動きを憂慮した幕閣の勘定奉行小栗上野介は、浪士組の評判を落とすために「偽浪士」神戸六郎や朽葉新吉らに乱暴狼藉をはたらかせた。浪士組が彼らを捕らえて取調べたところ小栗の関与が発覚し、４月９日に両名を斬首、両国で梟首に処した。翌10日の浪士組目付であった杉浦梅潭（ばいたん）の日記には「両国天誅」とある。

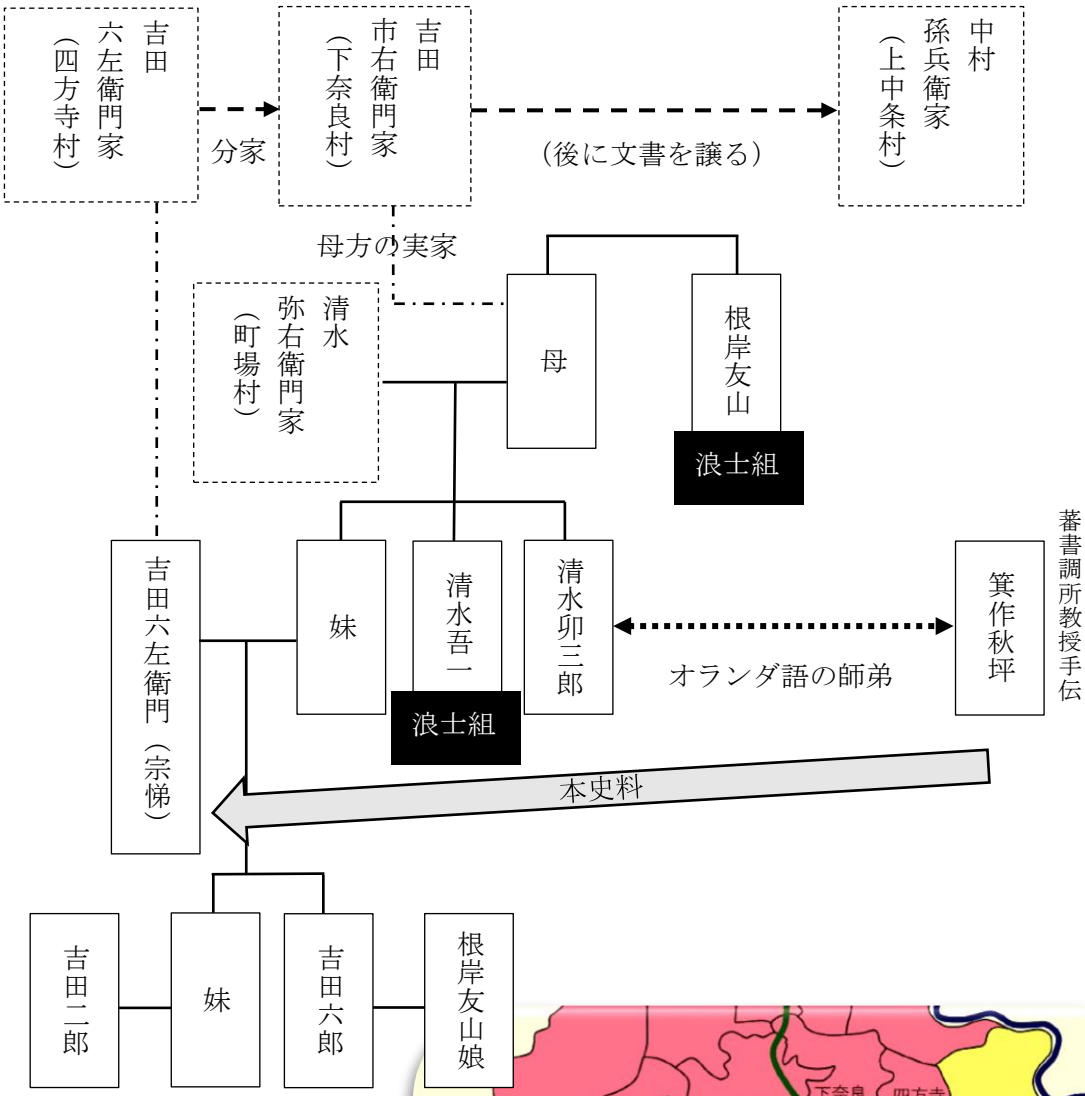
・明治７年（1874）に月岡芳年（よしとし）が刊行した『近世奇説年表』には、国のためと言って商家に押し入り金子を奪って酒食に耽る巨魁神戸六郎と岡田順蔵（朽葉新吉）の首が両国橋際にさらされ、広小路が見物人でうまった様子を描いた錦絵が収録されている。

・神戸らの殺害と梟首の影響もあって幕府は浪士組を放置できなくなり、４月13日に清河八郎は暗殺された。さらに幕府は４月14日、清河の命で両名の首を斬った浪士組の石坂周造、村上俊五郎を召しとるべく、三笠町の屋敷を取り囲み、馬喰町で石坂らを捕縛した。同日には浪士組幹部も拘束された浪士組は壊滅状態となる。

・清河らは４月14日に徒党して横浜に押し寄せることを計画していたともいう。

・４月15日、残った浪士組は「新徴組」と改称され、庄内藩預かりとなる。

○人物関係図



○地理関係

○参考文献

・杉浦梅潭日記刊行会編『杉浦梅潭目付日記 ： 文久二年－元治元年』（みずうみ書房、1991 年）
・埼玉県立文書館『収蔵文書目録第 42 集 諸家文書目録Ⅵ』（2003 年）
・小高旭之『埼玉の浪士たち―「浪士組」始末記』（埼玉新聞社、2004 年）
・日野市立新選組のふるさと歴史館『日野市立新選組のふるさと歴史館叢書』第十輯
「巡回特別展 新徴組―江戸から庄内へ、剣客集団の軌跡―」（2012 年）
・千葉大学附属図書館亥鼻分館古医書コレクション「近世奇説年表」
（http://opac.ll.chiba-u.jp/da/koisho/2576/?lang=0、2020 年 10 月 29 日最終閲覧）
・国文学研究史料館新日本古典籍総合データベース「文久新聞誌」
（https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100065077/viewer/、2020 年 10 月 29 日最終閲覧）